

スペインのニンニク用機械で将来の農業を考えた

北海道紋別市のナカザワアグリマ
 シーン(株)の山田俊作ダニエル代表が
 スペイン人のカルロスさんとともに
 来社された。カルロスさんはニンニ
 ク用機械に特化したスペインの農機
 メーカー JIBROCH 社の方で、同社
 は種子処理から播種、収穫、乾燥・
 調製までの一連の機械を扱う世界で
 唯一のニンニク専門メーカーであ
 る。ナカザワはその輸入元になる。

江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

く、府県の試験研究機関にも同社が
 輸入・販売している。
 さて、両氏はニンニクに関しての
 情報が欲しいと訪ねてこられたのだ
 が、僕はその筋に明るいわけではな
 い。ただ、カルロスさんのレクチャ
 ーを聞くうちに、同社のニンニク用

格で調達が可能だ。以前、
 イタリアの ENMA 展で
 見た移動式の穀物乾燥機
 を紹介したが、その乾燥
 機を北海道だけではな

機械の意義だけではなく、その話を
 通してニンニク生産に限らず、日本
 の農業経営者がこれからの時代に取
 り組むべき経営課題が明確になって
 いくのを感じた。

水田への畑作技術体系の導入や子
 実トウモロコシ生産を語るとき、面
 積当たりの収益より投下労働時間当
 たりの収益で経営を考えるべきとは
 本誌がいつも触れてきたことだ。日
 本の農家にとってあまりにも慣れ親
 しんでしまっている慣行の水稲生産
 技術やコメではなく、ニンニクとい
 うマイナー作物の生産であればこそ
 わかりやすいかもしれないからだ。

慣行の手仕事での手工業的な調製
 作業や人力による播種がまだ一般的
 なニンニク。しかも、これから進む
 労働力の圧倒的な不足。特殊な作物
 として産地が限定されてきたニンニ
 クであればこそ、新規産地で従来の
 生産方式にこだわらない革新的なニ
 ンニク経営が必要とされる時代にな
 るからだ。仕向け先も市場ではなく、
 加工需要に向けた契約栽培。消費者
 の国産志向だけに頼る高値販売がい
 つまでも続くとは思えない。規模拡
 大とコストダウンは喫緊の課題だ。
 JIBROCH 社の一連の機械は、北

北海道だけではなく、青森県などの農
 業経営者ら5、6人がすでに導入し
 ている。

話を聞いて驚いたのは播種機には
 機械式のほかに真空タイプもあるこ
 とだ。気になるのはニンニクの塊茎
 が植えたときに転んでしまうのでは
 という疑問だったが、それに対して
 カルロスさんはこう答えてきた。逆
 さに植え付けるということはほとん
 どなく、大体は横向きで植え付けら
 れる。それでも丁寧に植え付けた場
 合と比べ成長にそれほど大きな差は
 ない。それより作業スピードが遅い
 ために1日の処理量が限定され、播
 種適期を逃すことや慣行栽培ではダ
 イナミックな規模拡大もできない。
 そのことのほうが経営的に問題では
 ないかと。ただし、販売するうえで
 のこの機械の弱点はマルチ栽培がで
 きないこと。株間は狭くできるので
 面積当たりは変わらないが、条間が
 45cm くらい必要なため、慣行の植え
 付けに慣れた農家には受け入れられ
 にくいこと。しかし、真空播種機で
 あれば4条でも8時間で3haをこな
 せる。

最近では国内メーカーも各種の播
 種機を開発・市販するようになって
 いるが、こうした海外の技術が我が
 国農業にインパクトを与えることを
 期待したい。